



白聖

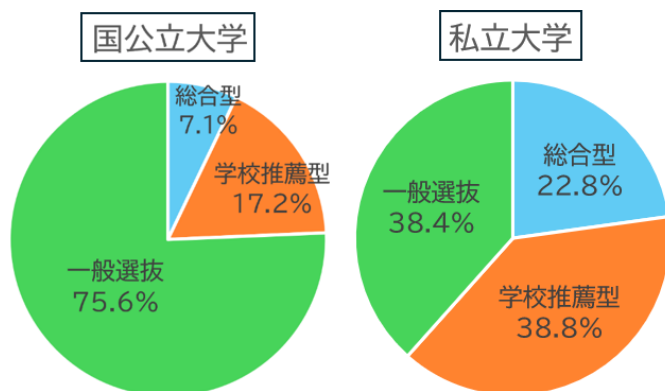
はくあ 第8号 令和8年7月8日発行



《大学入試について学ぼう①》

大学入試を大きく分けると、一般選抜、学校推薦型選抜、総合型選抜の3つに分けられます。近年では、総合型や学校推薦型の募集人員枠が拡大していますが、特に私立大学では、一般選抜よりも総合型や学校推薦型の募集人員枠が大幅に増えてきました。しかし、依然として国公立大学では一般選抜の募集人員枠が全体の約8割近くを占めています。今回の進路通信では本校生徒の殆どが第一志望校に挙げている『国公立大学』の一般選抜に注目して詳しく解説していきます。

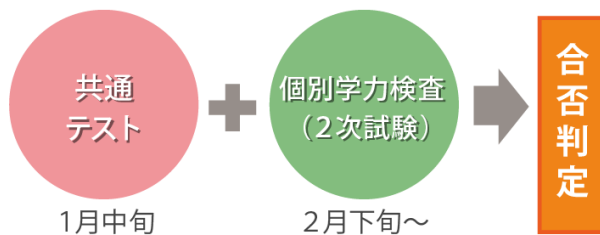
下の円グラフは、令和7年度入試の国公立大学と私立大学の募集人員の割合を入試選抜方法別に表したものです。一般選抜の割合を比較すると、両者の間では2倍近くの大きな差が生じていることが分かります。



※文部科学省「令和7年度入学者選抜について」より作成

【国公立大学の一般選抜とは】

国公立大学の一般選抜では、1次試験的役割を果たす「大学入学共通テスト」の得点と、大学別に実施される「2次試験（個別学力検査）」の得点の合計で合否を判定するケースが一般的となっています。国公立大学志望者は、1月中旬に実施される共通テストを原則として受験しなければなりません。共通テストは2025年度入試より新教科「情報」が加わり、国立大学は6教科8科目を課す場合が多く見られます。共通テスト受験後は自己採点を行い、その点数をもとに志望する大学を選んで願書を提出することになります。ですから、自己採点ではできるだけ正確に行う必要があります。模擬試験等で何度も経験を重ねておくとい良いでしょう。



2次（個別）試験の出願は共通テストの結果をみってから

注意したいのが願書の出願期間です。国公立大学の出願期間は、共通テストの約1週間後からスタートし、約10日間となっています。「前期日程」・「後期日程」・「公立中期日程」の大学を同時に申し込まなければならないので、出願時期になってから慌てることがないように、共通テストの目標点数に合わせて事前に複数の出願校候補を考えておく必要があります。

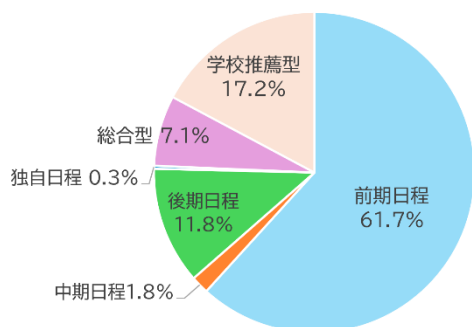
各大学で実施される2次試験（個別学力検査）は2月下旬から行われます。2次試験は「前期日程」・「後期日程」の2つの日程に募集人員を振り分けて選抜する「分離・分割方式」という制度で実施されます。受験生は前期日程と後期日程にそれぞれ1校ずつ出願できます。同じ大学・学部を2回受験することも、別々の大学・学部を受験することもできます。また、公立大学の一部では「中期日程」や「独自日程」を実施しています。これらをあわせると国公立大学は基本的には最大で3校の受験が可能となります。共通テストと個別試験の配点の割合や、科目ごとの配点は大学・学部等によって異なります。同じ大学・学部でも前期と後期で異なる場合も多いため、志望校の配点割合を確認しておきましょう。

	共通テスト	個別学力検査
東京大 理科一類 【前期】	110点	440点
東北大 法学部 【前期】	950点	1950点
弘前大 医学部-医 【前期】	1050点	900点
東北大 理学部-数学 【後期】	750点	1600点
弘前大 教育学部-学校 【後期】	950点	200点
都留文科大 文学部-国文 【中期】	500点	300点

(裏面に続く)

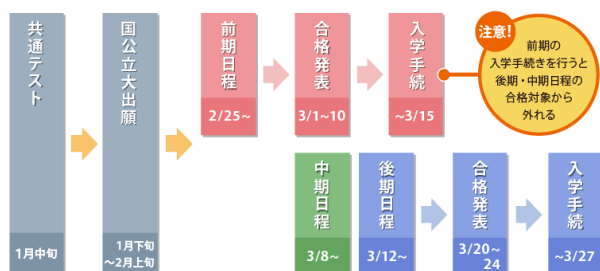
国公立大学の募集人員は、一般選抜（前期日程・中期日程・後期日程・独自日程）が75.6%で8割近くを占めています。日程別でみると、前期日程と後期日程の割合はおよそ6:1と前期日程の割合が非常に高くなっています。近年では後期日程を廃止する大学が増えていますので、志望校の後期日程の有無を確認しておきましょう。

令和7年度 国公立大学日程・選抜方式別募集人員の割合



※文部科学省「令和7年度国公立大学入学選抜の概要」をもとに作成

注意が必要なのは前期日程で合格して入学の手続きを行うと、中期日程、後期日程を受験しても、合格の権利を失ってしまうということです。つまり、前期日程の合格者は中期日程、後期日程の可否を確認することなく前期日程で受験した大学への入学の判断を迫られます。そのため、第1志望校は前期日程で受験するのがセオリーとなっています。中期日程と後期日程でどちらも合格した場合は、より志望順位の高い大学を選択して入学の手続きを行うことが可能になります。



【Benesse マナビジョンより引用・抜粋】

本校の令和7年度の国公立大学一般選抜における合格者総数は129名で、前期日程は84名、後期日程は35名、中期日程は10名でした（学校推薦型選抜は8名、総合型選抜は22名）。そのため、国公立大学合格者総数159名のうち、一般選抜合格者割合は「81.1%」で、10名中8名以上が一般選抜で合格するという結果でした。

全国的にも学校推薦型や総合型での募集定員が増加傾向にありますが、本校ではまだまだ学力勝負の一般選抜が主流であり、教科学力が大切なのは間違いありません。

ん。厳しい受験を乗り越えるためには、計画的な学習と毎日の努力の積み重ねが必要不可欠です。第一志望校合格へと繋がる「道」は何よりも確かな基礎学力だと思います。今後は、学校推薦型選抜と総合型選抜の内容について詳しく解説していく予定です。

《第1回最難関大学志望者合同学習会》

7月4日（土）・5日（日）の二日間、青森高校を会場に「第1回最難関大学志望者合同学習会」が開催されました。この学習会では、高い志を持つ生徒同士が切磋琢磨しながら学びを深め、個々の思考力を伸ばすとともに、進路志望の達成に向けて高い目標と具体的な目的意識を持ち、主体的に学んでいく意欲を高めることを目的としています。最難関大学を志す2年生を対象に、年に3回開催されていますが、今回は青森高校・弘前高校・八戸高校を中心とした最難関大学を志望する県内の生徒66名が集まり、青森高校から20名が参加しました。

第1回目となる今回の学習会では、三つの重点目標が掲げられました。まず一つ目は「最難関大学入試レベルの問題に取り組み、解説講義を聞くことで、求められる知識・技能、思考力・判断力・表現力の水準を知る」こと。二つ目は「他校生と共に学ぶことで、全国のライバル（仲間）の存在を自覚すると共に、学びの深め方・広げ方を知る」こと。そして三つ目は、「ここで得た学びの方法を指針とし、受験までの自己の学びに生かす主体的な態度を身につける」ことです。

やはり最難関大学の合格を勝ち取るためには、ただ漫然と勉強するのではなく、目的意識をしっかりと持ち、自分の学びが正しく行われているかを振り返り、常に改善していく力が求められます。また、よく青森高校の生徒に見られがちな損得や有利不利、要不要・用無用という低次元な思考での学習を捨てること、さらには、この学習会で吸収したことを日々の学習につなげて、いかに自己研鑽に努めることができるかが重要だと思います。



第2回学習会は12月中旬に、第3回学習会は3月中旬に2年生を対象に開催予定です。